

教会学校 教案ガイド

教師メモやメッセージアウトラインを読む前に必ずディボーションをしましょう。

1. みことば

祈りながら今週のテキスト(聖書箇所)を何度も繰り返し読んでください。また、今週の暗唱聖句を決定して、覚えましょう。

2. 主題の読み取り

今週のみことばの中心テーマを自分のコトバで、1つの文章にまとめて書きあらわしましょう。

例 ○:イエスさまは、弟子たちがイエスさまを救い主と信じるように
カナで奇跡を行いました。(×:カナの婚礼と奇跡)

3. 教えられたこと

今週のみことばを通して、神さまがあなたに語ってくださったことを書きあらわしましょう。

4. メッセージの作成

◇「教師ノート」と「メッセージアウトライン」を参考にしてください。

◇注意深く聖霊さまの導きに従いましょう。

教会教育部公式サイト <http://ce.ag-j.or.jp/>

教会の働きのためにご自由にお使いください。営利目的での使用は禁じます。
すべての内容の著作権は、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団教会教育部にあります。

教 師 ノ ー ト

日付	2015年 2月 1日
単元	サムエル記・1
テーマ	神に心を向ける
タイトル	サムエル
テキスト	第一サムエル1－3章
参照箇所	暗唱聖句(教会で使用している聖書訳を記入して下さい) 第一サムエル3:9
AG 日曜学校教案参照箇所 (リンクできます)	

□導入

今日から、サムエル記のメッセージです。おもな登場人物はみんなもよく知っているダビデさんです。でもその前に、「サムエル記」というくらいですから、サムエルさんのお話をしましょう。サムエルさんは、みなさんと同じくらいの歳のときに、神さまのことばを聞いたんですよ。そして、預言者として神さまに用いられました。

□ポイント1 ハンナはサムエルを生みました(1章)

シロという町の神殿で、ハンナという女の人が熱心にお祈りしていました。ハンナはエルカナという人と結婚していましたが、まだ子どもがいませんでした。ハンナはそのことをとても悲しんでいたのです。ハンナは「もし神さまが、男の子を授けてくださいますなら、私はその子の一生を主にささげます」と祈りました。

神殿の祭司エリは、ハンナがあまりにも熱心に祈っているのを見て、酒に酔っているのではないかと思いました。ハンナは、「酔っているわけではありません。私は主の前に、私の心を注ぎ出していたのです」と言いました。エリは、ハンナが真剣に祈っていたことを知って、「安心して行きなさい。神さまが、あなたの願いをかなえてくださるように」と言いました。ハンナの顔は、平和と喜びの表情に変わっていました。ハンナはやがて男の子を生みました。名前をサムエルとつけました。

☞「かみそりを当てません」・・・その子を神にささげるものとして聖別しますという意味。

□ポイント2 サムエルは成長しました(2章)

神さまは、ハンナの願いをきいて、男の子を与えてくださいました。ハンナもまた、神さまに約束したことを守って、サムエルを神さまにささげることにしました。ハンナは、サムエルを祭司エリにあずけました。サムエルが3歳くらいのときでした。こうしてサムエルは、幼いときから両親のもとを離れ、神殿に住みました。祭司エリのもとで、神さまのご用を手伝いながら成長したのです。

一方、一緒に暮らすエリの子どもたちは、神さまに背く者たちでした。彼らの「罪は、主の前で非常に大きかった」とあります。彼らは、神さまにささげ物をしようとする民を脅して、肉を取り上げてしまうような人たちだったのです。

☞エポデ・・・祭司が祭儀のときに着る「栄光と美を表わす聖なる装束」(出エジプト 28:2)。金・青・紫・緋色のより糸で織った亜麻布で作られた。金の環で「さばきの胸当て」が結びつけられていた。

□ポイント3 サムエルは神さまの声を聞きました(3章)

(何年か経って)ある夜、いつものようにサムエルが神殿で眠っていたときのことです。サムエルは、「サムエル、サムエル」と自分をお呼ぶ声を聞きました。サムエルは、エリが寝ている部屋へ走って行って「はい、ここにおります、私をお呼びになりましたか」と言いました。ところがエリは、「いや、私は呼んでい

ないよ。帰っておやすみ」と言いました。そこでサムエルは、寝床に戻り、横になりました。すると、また「サムエル、サムエル」と呼ぶ声が聞こえたので、走っていき、「はい、エリ先生。お呼びになったので来ました」と言いました。しかし、またエリは「いや、私は呼んでいないよ。帰っておやすみ」と言いました。そこでサムエルが戻って寝ると、また同じことが起こりました。エリのところへ行って「はい、ここにおります、私をお呼びになりましたか」と言いました。もう3回目です。すると、とうとうエリは、サムエルを呼んでいたのは神さまだ、ということがわかりました。エリは、サムエルに言いました。「戻って寝なさい。そして今度呼ばれたら、『主よ。お話してください。しもべは聞いております。』と神さまに申し上げなさい。」4度めに声を聞いたとき、サムエルは、エリに言われたとおりに答えました。すると神さまは、サムエルに語られました。それは「息子たちが神さまに罪を犯しているのに、エリはそれを放っておいたので、神さまが罰を与える」ということでした。

朝になったとき、サムエルは、神さまのことばをエリに伝えるのが怖くなりました。しかしエリは「神さまがお告げになったことを隠さず全部教えておくれ」と言いました。それでサムエルは、すべてのことを話しました。エリはそのことばを受け入れ「その方は主だ。主がみこころにかなうことをなさいますように」と言いました。こうしてサムエルは、神さまから声を聞き、それを人々に告げる「預言者」になったのです。

□結論 サムエルは、子どものときから神さまの声を聞き、仕えました

□適用（聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう）

みなさんは、神さまの声を聞けると信じますか？

イスラエル人は、その昔はモーセなどを通して神さまの声をきいていました。しかし、「そのころ、主のことばはまれにしかなく、幻も示されなかった」とあるように、サムエルの時代には、神さまの預言をする人はほとんどありませんでした。そんなとき、特別に神さまの声を聞いたのは「少年」だったサムエルです。みなさんも、サムエルのように、小学生のうちから教会で育ったことは幸せです。ただ教会に来ているだけでなく、神さまに心を向けて、神さまのことばを大切にしましょう。

神さまに心を向けていれば、ディボーション・お祈り・礼拝メッセージだけでなく、お父さん・お母さん・先生や大自然を通して、神さまの声を聞くことができます。サムエルやエリやハンナのように神さまにいつも心を向けていきましょう。神さまに、心を注いで祈った後の、ハンナの顔は以前とは違いました。サムエルとエリが、神さまに心を向けるまで、神さまは語られませんでした。「しもべは聞いています」という姿勢の人に、神さまは語ってくださるのです。

逆にエリの子どもたちは神さまに心を向けない人でした。みなさんも、親が神さまを信じていても、いなくても、自分自身で神さまを信じて仕えていくことが大切です。また、サムエルは、そんなエリの子どもたちと一緒に育ちましたが、神さまに仕え続けました。人に影響されず、自分の心を神さまに向けて、仕えていくことから、ブレないようにしましょう。

神さまのことばを、恐れず伝える人になりましょう！

サムエルは、神さまの声を聞いただけでなく、伝える人になりました。先生であるエリに神さまの罰のことを伝えるのは怖かったはずですが、でも、サムエルは勇気をもって伝えました。みなさんも、神さまのみことばを恐れず勇気をもって伝えられる人になりましょう。

教 師 ノ ー ト

日付 2015年 2月 8日

単元 サムエル記・1

テーマ 召された者の生き方

タイトル はじめの王サウル

テキスト 第一サムエル8-10章

参照箇所

暗唱聖句(教会で使用している聖書訳を記入して下さい)

エペソ4:1 or 第一サムエル10:9

AG 日曜学校教案参照箇所 (リンクできます)

□導入

みんなのよく知っているダビデはイスラエルの王様でした。でも実は2代目の王様です。今日は、イスラエルの初めの王様のお話です。

□ポイント1 人々は王が欲しいと言いました(8章)

先週、少年サムエルが預言者になったお話をしました。その後、サムエルはずっと神さまに仕えました。サムエルは立派な預言者になり、そしてもう歳をとりました。そこで、2人の息子たちに、さばきつかさの仕事を引き継ぎました。しかし、息子たちは神さまに従わない者でした。ウラでお金をもらい、不正な裁判をしていたのです。そこで、人々はサムエルの所にやって来て言いました「あなたはもうお年を召されましたが、息子さんたちは、あなたのように神さまに従って正しく国を治めてくれる方ではありません。どうか今、他の国がしているように、王様を立ててください」。人々は、王様さえいれば国をきちんと治めて、平安な世の中にしてくれると考えたのです。

サムエルは、人々の願いが気に入りませんでした。イスラエルを治める王はだれですか？それは神さまです。神さまこそが、ずっとイスラエルを守り・祝福してくださるのです。イスラエルの民が、神さまの特別な国民であることを喜ばず、他の国と同じように王様を求めるなんて、サムエルも神さまも大変がっかりしたでしょう。サムエルは、神さまにお祈りをしました。すると、神さまは、「彼らの願うとおりにしなさい」と答えられました。サムエルは、それを人々に伝え、警告しました。「あなたがたは王を立てたいといっていますが、王を選べば苦しみを負担させられることが分かっているのですか。王を立てるということは、あなたがたの息子を戦争に行かせられたり、娘を召使いにされたり、財産や農作物を税金として取り上げられたりするということです。王はあなたがたを奴隷のようにする権利さえ持つのですよ。そうなってから後悔しても、神さまはあなたたちを助けて下さりませんよ。それでも王が欲しいというのですか？」人々はそこまで警告されても、「どうしても王様が欲しい」と言い張りました。神さまからの忠告を聞かず、自分たちの考えが正しいと思い込んでいたのです。神さまは、「彼らの言うことを聞き、彼らにひとりの王を立てよ」と言われました。

👉 さばきつかさ・・・裁判をする人。正しい人を弁護し、悪人に罰を与える。

👉 なぜ、神は民の言うとおりに王を立てさせたのか？ 民が神の恵みを忘れ、主を退けて王を望んだのは大きな罪。しかし、神は強制的に人間を支配する方ではない。放蕩息子のように、私たちがわがままを言ったとき、その思うままにさせてくださる。ただし、神に従わなかった結果は、私たち自身が受けなければならない。同時に、サウルを選び、ダビデが起こされ、キリストを遣わしてくださるという、すべてのことが、神の愛のご計画の内であった。

□ポイント2 神さまはサウルを王に選びました(9章)

9章から、サウルという人が登場します。サウルは「美しい若い男で、イスラエル人の中で彼より美しい者はいなかった。彼は民のだれよりも、肩から上だけ高かった」とあります。ある日、サウルのお父さんの大切なロバがいなくなりました。そこでサウルはロバを捜しに出かけました。しかし、何日もかけて、いくつもの山や町を捜し回りましたが、見つかりませんでした。そこで、「神の人」つまり預言者サムエルに力を借りることにしました。昔イスラエルでは、困ったとき、預言者に相談する方法があったのです。

一方、サウルがサムエルの所に来る前の日のことです。じつは、神さまは、先にサムエルに語られていました。「明日の今ごろ、私はひとりの人をあなたのところに遣わす。あなたは彼に油をそそいで、わたしの民イスラエルの王様にしなさい。」神さまは、サウルを王にするために、ロバの事件をとおして、彼をサムエルのところに導いたのです。17節から22節を読んでください。サウルはびっくりして、何が起きているのか理解できないまま、サムエルと食事をしました。

☞ロバ探しのエピソード等の説明は簡略にして、「神さまがサウルを選んだ」ということが要点として伝わるようにしましょう。

□ポイント3 サウルはイスラエルの王になりました(10章)

次の朝サムエルは、神さまのいうとおりに、油のつぼを取ってサウルの頭に注ぎました。サムエルはサウルに言いました。「主が、愛するイスラエルの民の王として、あなたに油をそそがれました。帰り道で、主の霊があなたの上に激しく下ると、あなたは新しい人に変えられます。」サムエルが言ったしるしは本当に起こり、神さまがサウルの心を新しく変えてくださいました。そしてサウルは預言をするようになりました。前からサウルを知っていた人たちは、新しく変わったサウルを見て、非常に驚きました。

サムエルは、改めてみんなの前で、正式にサウルを王として選びました。公平に、クジで選びましたが、やはりサウルに当たりました。その時、サウルは荷物の影に隠れていました。彼が出てきたとき、非常に立派な青年だったので、人々は「王様、バンザイ！」と言って、大喜びしました。こうしてサウルが、イスラエルの初めの王になりました。

☞油をそそぐ・・・ここでは、神さまに選ばれ、神さまに仕える奉仕をする人だということを表す儀式です。

□結論 神さまは、サウルをイスラエルの初めの王にしました

□適用（聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう）

神さまに特別に選ばれたみなさんは、どう生きるべきでしょうか？

サウルは背は高かったですが、あとは普通の若者でした。しかしサウルは、神さまに召され、心を変えて新しくされ、王になりました。イエスさまに救われたみなさんも同じです。普通の小学生ですが、神さまに特別に導かれ、新しくされたのです。そのように神さまの働きに召されたみなさんは、どのように生きるべきでしょうか？神さまはどのような歩みを喜ばれるのでしょうか？それは、イエスさまに心の王さまになっていただくことではないのでしょうか。イスラエルの民は、神さまに従うより、王を求めました。みなさんは、心と生活の中心に神さまを王として向かえ、従っていきましょう。サウルはこの後、神さまのことばに忠実に従わず、自己中心で高慢になっていきました。それで王の座から退けられてしまいます。みなさんは、自分の力ではなく、神さまの愛によって救われたことを忘れないようにしましょう。神さまが愛と力で助けてくださらなければ、召された働きはできません。いつも心の王さまであるイエスさまに従いましょう。サムエルはどうして良いか分からないとき、すぐに神さまに祈りました(8:6、21)。

また、みなさんも、教会でリーダーになったり、学校でクラス委員やクラブの部長に選ばれたりするかもしれません。神さまがあなたを選んだと信じて、責任を果たしましょう。神さまが、あなたに足りない愛や知恵を与えてくれるよ。また他の人が選ばれたときも、協力できる人になろう。

教 師 ノ ー ト

日付	2015年 2月15日
単元	サムエル記・1
テーマ	主は心を見る
タイトル	油を注がれたダビデ
テキスト	第一サムエル16章
参照箇所	暗唱聖句(教会で使用している聖書訳を記入して下さい) 第一サムエル16:7
AG 日曜学校教案参照箇所	(リンクできます)

□導入

いよいよダビデ登場です！彼はどのようにして王になったのでしょうか？

※教師は先週と今週のテキストの間の箇所(11～15章)を必ず読んでください。特に、13:1～15と15:1～35で、サウルの墮落の様子を理解しましょう。彼は、自分が神に選ばれたこと、神の助けなしには立派な王にはなれないことを忘れ、高慢になりました。

□ポイント1 神さまはサムエルをエッセイのところ遣わされました(1-5節)

サムエルはサウルを王にしたことを悲しんでいました。預言者サムエルのことばを守らず、神さまの命令にも従わないようになっていったからです。サウルの心は、すでに神さま中心ではなく、自分中心になっていました。

そんなとき、神さまはサムエルに「エッセイのところに行きなさい。彼の息子たちの中に、新しく王になる者を見つけたから」と言われました。しかし、サムエルは「そんなことをしたら、サウルに殺されます」と言いました。すると神さまが、うまくいく知恵と命令をくださいました(2～3節)。そこで、サムエルは、神さまに言われたとおり、ベツレヘムに行き、エッセイと息子たちを、「いけにえをささげるので一緒に来てください」と言って、招きました。

□ポイント2 神さまはダビデを選ばれました(6-13節)

エッセイの息子たちのうち、エリアブを見て、サムエルは「確かに、主の前で油をそそがれる者だ。」と思いました。ハンサムで体格も立派で、しっかりして見えたのでしょう。しかし神さまは、「彼の見た目のカッコよさや、背の高さを見てはならない。新しい王に選ぶのはエリアブではない。私は人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」とおっしゃいました。

エッセイは、ひとりずつ、次々とサムエルの前に進ませましたが、どの息子も神さまが新しい王に選んだ人ではありませんでした。こうして7人の息子を見た後で、サムエルはエッセイに言いました。「子どもたちはこれで全部ですか。」エッセイは「まだ末の子が残っています。あれは今、羊の番をしています」と答えました。サムエルは「その子を連れて来なさい」と言いました。

エッセイは人をやって、その子を連れて来させました。それがダビデでした。ダビデは元気そうで、目がキラキラ輝く少年でした。「血色の良い顔で、目が美しく、姿もりっぱ」でした。その時、神さまはサムエルにおっしゃいました。「さあ、この者に油を注げ。この者がそれだ。」

そこで、サムエルは油の角を取り、兄弟たちの真ん中でダビデに油を注ぎました。神さまに選ばれ、神さまに仕える人として聖別されたことしるしです。「主の霊がその日以来、ダビデの上に激しく下った」と書いてあります。ダビデが実際に王になるのは、まだまだ先ですが、その日から、彼は神さまに選ばれた器として用いられていきます。

□ポイント3 ダビデはサウル王に仕えました(14-23節)

その頃、もはや神さまの霊はサウルを離れてしまいました。代わりに悪い霊が彼をおびえさせました。そこでサウルの家来たちは上手に立琴をひく者を捜して、音楽でサウルの具合がよくなるようにしようと考えました。

すると、ひとりの家来が「私はベツレヘム人エッサイの息子を見たことがあります。琴がじょうずで勇士であり、戦士です。ことばには分別があり、体格も良い人です。主がこの人とともにおられます。」と言いました。ダビデのことです。

ダビデはサウルのもとに来て仕えるようになりしました。サウルはダビデをとて気に入り、愛しました。悪い霊がサウルに臨むたびに、ダビデは立琴を手にとって弾きました。そうすると、サウルは元気を回復して、良くなり、悪い霊は彼から離れました。ダビデは立琴を演奏するだけでなく、サウルの道具持ちにもなりました。

☞主からの悪い霊・・・神から出るものが悪であることはあり得ない。しかし世にある悪い霊も、結局は神の支配下にある。神が、聖なる霊をサウルから取り去られたとき、代わりに悪い霊が入ることも、神にとっては想定内だった。そういう意味で、悪い霊も、神の主権のもとに、サウルに入ることができたと言える。

□結論 神さまは、ダビデをイスラエルの王に選びました

□適用 (聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう)

1. 神さまは心を見てくださいからお方ですから、私たちも、外見で自分や相手を判断しないようにしましょう
神さまは、外見でなく、私たちの心を見てくださいています。ですから、身長や顔立ちなどはもちろん、みなさんの成績表や運動会の順位を見ているではありません。みなさんも、人をうわべで判断しないようにしましょう。まず自分自身の外見や能力を見て、クヨクヨしたり、自慢したりしないようにしましょう。そして、お友だちに対しても同じです。教会に来ているとか、お祈りが上手にできるとかではなく、心がイエスさまに喜ばれることが大切なのです。
2. 神さまは私たちの心を見てくださいからお方ですから、神さまに喜ばれる心になろう
サムエルがエッサイの息子たちを招いたとき、ダビデはその場に来ることも必要と思われず、みんなの代わりに羊の番をさせられるような、小さな末っ子でした。しかし、神さまはダビデの心を見て、王に選ばれました。では、神さまは、どんな心を見て喜ばれるのでしょうか？(ダビデの心はどんな心か？第一サムエル16:18、詩篇23・51・103篇などを读もう)何でもご存じの神さまは、私たちの心がカンペキでないことはご存じです(エレミヤ17:9、きたない思い・ズルい考え・ねたみ・意地悪・高慢などがある)。それでも愛を持って心を見てくださいますので、怖がることはありません。すぐに悔改める正直な心、弱くても神さまに頼る心などが喜ばれるのです。何でもご存じの神さまが心を見てくださいますので、心を隠そうとすることは無駄です。どんな心でも神さまにオープンにしましょう。

教師ノート

日付	2015年 2月22日
単元	サムエル記・1
テーマ	神を信頼して、困難にチャレンジする
タイトル	ダビデ対ゴリヤテ
テキスト	第一サムエル17章
参照箇所	暗唱聖句(教会で使用している聖書訳を記入して下さい) 第一サムエル17:50 or イザヤ12:2
AG 日曜学校教案参照箇所	(リンクできます)

□導入

今日は、世界中のこどもたちに大人気のお話です。

□ポイント1 ゴリヤテはイスラエル軍に挑戦してきました(1-11節)

ダビデがサウルの家来になった頃、イスラエルとペリシテに戦いが起こりました(ダビデはサムエルから油注ぎを受けましたが、まだサウルが王で、ダビデはその家来でした)。サウルとイスラエルの兵はペリシテ人を迎え撃つため、戦いの準備をしていました。

ペリシテ人は向こう側の山の上に、イスラエル人はこちら側の山の上に、谷をはさんで向き合いました。すると、ペリシテ兵の内から、ひとりの代表戦士が出て来ました。ゴリヤテという、3メートルもある巨人でした。しかも、青銅のかぶと、体には50kg以上のよろい、足には青銅のすね当てという完全武装です。また、肩には青銅の投げ槍を背負っていて、その穂先は、鉄で6kg以上ありました。

ゴリヤテは、イスラエル人の陣に向かって叫びました。「ひとりを選んで、俺の所によこせ。俺と勝負して勝ったら、俺たちはお前らの奴隷になってやる。でも俺が勝てば、お前らが俺たちの奴隷なるのだ。」そういわれても、イスラエル軍の代表になる者はいませんでした。みんな怖がっているのです。民のだれよりも、肩から上だけ背が高く、かつては勇敢だったサウルも、もはや臆病になっていたのでしょう。

何日たっても、だれもゴリヤテと勝負しようとしません。サウルとイスラエル兵は、それを聞いて、元気をなくし、恐れて気が沈むばかりでした。

□ポイント2 ダビデがゴリヤテの挑戦を受けました(12-40節)

その頃、父エッサイは、ダビデに頼んで言いました。「ペリシテとの戦いに言っているお兄さんたちに食べ物を持ってきておくれ。」イスラエル軍の中にはダビデのお兄さんたちも3人入っていたのです。ダビデ自身は、サウルの家来でしたが、お父さんのところで羊飼いの仕事もしていたので、宮殿へ行ったり、帰ったりしていたのです。

ダビデが戦地に着いて、お兄さんたちと話しているとき、またゴリヤテが「だれか俺と戦うヤツは出て来い!」と言いました。ダビデは、恐れているイスラエル兵たちに怒って言いました。「生ける神さまがついているイスラエルをバカにするとは、あのペリシテ人はいったい何者ですか!」ダビデにとっては、イスラエルをバカにすることは、神さまをバカにすることだったのです。それを聞いて兄エリアブはダビデを叱りました。

サウルはダビデを呼び寄せました。ダビデは「私が行って、あのペリシテ人と戦いましょう。」と言いました。しかしサウルは「無理だ。お前はまだ若すぎる。」と答えました。 ※34～37節を読んでください。ダビデは、いつも羊を守るために、ライオンやクマなどと戦っていました。そんな危険な目にあっても、いつも必ず神さまがダビデを守り、勝利させてくださいました。普段の生活の中で、いつもそういう体験をし

ていたのので、ダビデは神さまを100%信頼していたのです。だから、ゴリヤテと戦っても、神さまが必ず勝たせてくださると、確信することができたのです。

それを聞いて、サウルはダビデに自分の立派なよろいかぶとを着させ、剣を与えました。しかし、ダビデは「こんなものを着けては、歩くこともできません。慣れていないからです」と言ってそれを脱いでしまいました。それから自分の杖を手に取り、川から5つのなめらかな石を選んできて、それを羊飼いの使う投石袋に入れました。そして、石投げを手にして、勇敢にゴリヤテの前に出て行きました。

👉 **投石袋**: 羊飼いや戦士は石投げを携えていたが、投げる石は肩から下げた袋に入れて持ち運んだ。

石投げ: 革などで作られ、中央は少し幅が広くなり、くぼみがある。このくぼみに石を入れ両端を片手で持ち、頭上で振り回して一端を放し、石を飛ばす。一般に羊飼いが家畜を野獣から守るために用いた。(いのちのことば社「新聖書辞典」より)

□ポイント3 ダビデはゴリヤテに勝ちました(41-58節)

ゴリヤテは、ダビデが若くて、ハンサムな少年だったので、バカにしました。しかしダビデは少しも恐れず、堂々と言いました。※45~47節を読んでください。ダビデは、神さまがともにいて戦ってくださると信頼しきっていました。そして神さまは必ず勝利させてくださると確信していたのです。

いよいよゴリヤテが、ものすごい迫力で近づいてきます。ダビデもすばやく戦場を走って行き、勇敢に立ち向かっていきます。ダビデは袋の中に手を差し入れ、さっき拾った川の石を一つ、取り出しました。そしてそれをサッと石投げ器に入れました。頭の上でそれをブルブルンと振り回しながら、狙いを定めます。そして、それをビュン！と放ったとき、石は見事にゴリヤテの額に命中しました。石は額に食い込み、彼はドッシーンとうつぶせに倒れました。

こうしてダビデは、石投げと一つの石で、巨人ゴリヤテに勝ちました。よろいも着けず、剣ももたない羊飼いのダビデが、完全武装の3メートルの戦士をやっつけたのです。ペリシテ人たちは、ゴリヤテが死んだのを見て逃げ出しました。サウルやイスラエルの兵たちも、ダビデの強さに驚きました。

□結論 ダビデは神さまを信頼し、ゴリヤテに勝利しました

□適用 (聞き手に最もふさわしい適用が与えられるように祈りましょう)

みなさんは、イスラエル人のように、困難を前にして意気消沈していませんか？(勉強・スポーツ・習い事・遊びなど) ダビデは、なぜ恐れずゴリヤテに立ち向かえたのでしょうか？神さまが必ず助け、勝利させてくださると信頼しきることができたからです。ダビデは、普段から、生活の中で神さまに信頼し、守っていただく体験を積み重ねていました。神さまはいきなり大きな敵と戦わせるようなことはなさいません。あなたも、日常の小さなことから、神さまに頼っていきましょう。そうすれば、いつも神さまの守りを体験できます。そのような体験の積み重ねから、大きなことにも恐れずにチャレンジできる信仰を養いましょう。あなたはダビデのように、神さまに選ばれ、油を注がれた者です。神さまがともにいてくださいますから、何でも恐れずチャレンジできるようになりましょう。

ダビデは、小さな石で戦いましたが、私たちの戦いの武器は、祈りとみことばです(エペソ6:17、18)。ディボーションや暗唱聖句でみことばを蓄えよう！いつも聖霊に満たされて祈りを積み重ねよう！ダビデは日ごろからまじめに働き、石投げの訓練をし、時間を無駄に使っていませんでした。また羊飼いをしながら、賛美や祈りを忘れませんでした(詩篇)。そんなダビデだからこそ、神さまは彼が懸命に投げた1つの石をゴリヤテに命中させてくださいました。あなたも、みことばの勇士として、いつも祈りとみことばに専念し、準備しておきましょう。